

同盟活動によって機関誌は、いままさに「革命的組
織者」としての任ムを果さなければならぬ。この任
ムを果さなければならぬ。この任ムは、機関誌の
諸々の機能の充実と、意×づけを百回くり返すこと
以上に重要な内容をもっている。

←

七〇年守備へむけての同盟活動にとって、それが従
来の「左派指導部」としての活動から本質的に転換し
なければならぬ事は、まさに権力との対極に位置づ
けられた同盟が単に綱領的補完においてのみならず、
戦術と組織の分野でも具体的な組織論の展開をせま
れている。主体的条件に規定された内容である。

六〇年代前半における左翼の宣伝活動の性格は、そ
の階級斗争の基調（平和と民主主義）および、真の革

命的左翼の萌芽期という条件から、基本的には啓蒙主
義を脱することはできなかった。そして現在の社共、
およびその反対派の一部において、それが社会主義
的反対派的党、またはそれに對する単なる反対派党で
あるために、この基調は失われ続けている。従って

「全人民的暴露」の代りに「党の宣伝」が教条の宣伝
としてなされ、宗派主義がその基本となっている。「生
きたことば」による政治の暴露、現場をとらえた暴露
が至人民を組織し、活動させるかわりに、自己の党派
の立場の弁明と、政策の解説が排外的他派批判とし
てながらと陳述され、それでは、左翼チャー
ナリズムの言辭がそれにかわることになっている。こ
のあたりで六〇年代階級斗争の宣伝機構の基調「左翼
啓蒙主義」は、階級斗争のあらたな面^局で墜落と腐敗に類

してゐるといふねばならない。

(一)

現在あみだされてきた七〇年代階級斗争の萌芽的基調は、同盟の主體的条件と此自体に本格的、革命的な変革の計画的準備をせまるものである。それは単に同盟とその指導部における問題、台法、非台法の区別と連関といつてはとどまらず、同盟の活動とその活動が拡大されるであろう分野における諸問題との関連でこの計画的準備がなされねばならないといつてゐる。この中で機関紙活動の任ムは、権力への直接攻撃が準備され、その準備がより大規模な拡大と、組織における「屈伸性」を保証しつゝ進行することを保障することである。このかざりて同盟の機関紙誌は単なる「号外主義」と「書信仕事」といつの二の偏向を批判し、一軌と決別するものである。前者については、もし我々がたゞそれだけを機関紙誌の任ムとするならば、週刊新聞や隔月刊の雑誌では不十分であり、ただ「武装」

して又時々に結集せよ」といつてを大量につくることで事が足りる問題であり、まさにやつしたものでなければならぬといふ事で週刊の新聞や隔月刊の雑誌は全く無意味なのである。後者については、「改進黨主義」との関連でのべたような冷徹な再生産するものとしてあるだけでなく、組織の基調と方向についての問題を提示するがために、自由主義と無政府主義を容認し、その政治的基礎を与える結果になるといつて題である。もとより我々は党内における理論斗争を積極的に組織しその成果を獲得してゆかねばならないし、そのために党内機関紙「プロレタリア通信」が活用されなければならぬ。しかしそのかわりに機関紙誌を「自由な論壇」の花咲く楽園にしてはならない。中央

政治機関紙、理論誌の任ムは、同盟が街頭での対権力斗争に集中し、あるいは「陣地」内での部隊の再編成につとめる、それそれぞれの局面を一貫して明示し、さらにかついてゆくための導きの糸として提示される、その

たつな系をはりめぐらせることである。激動と沈静が交互にあつたれ、予想しがたい情勢がおしよせるといふ局面にたいして、その全期間を通じての基調を明らかにし、おこりうるすべての情勢への予想をばななく、それへの備えを實踐的に示さなければならぬ。この任ムが対象とする戦術は単に同盟内にとどまらず抑圧され支配されている全階級にわたるものであるといふ点でも、機関紙誌はわが同盟の美学的組織者としての任ムを果さなければならぬ。それによつてわが同盟の任ムはかぐてますます計画としての戦術として発展する展望をもつのである。

(三)

このたつな機関紙誌は、その内容においては、①全人民的暴露、政治的宣伝、②行動へのよびかけ、にとどまらず、③同盟の政治方針、政治指導の継承性、系統性をつねに明示し、まさにそのたつなかつた戦略の徹底化と意識化をはかるものである。革命斗争が日

常的活動と斗争の延長上を考へられぬものであるといふことは、突如とした思ひつきや突発的動機にたつて革命斗争が勝利するといふことと多論なく、そのための周到な準備が重ねられなければならぬといふことである。このかざりて戦略とは単に戦術の集積なりには図式的勢力配置論にとどまらぬ、革命的な世界観を基礎としてゐる。だがわれわれにとってこの世界観(革命的プロレタリアートの戦略戦術)とは理念の展開のうちにはなく、階級形成を指導する党の型、組織として実現されるものである。この意味において同盟は全体としてインテリたちの個人的諸能力をこえた次元で自己自身をこえた次元で自己自身をかこつた世界観的党派として実現するものであつて、機関紙誌の系統性、継承性とはその内容を明示するものである。

(四)

われわれは同盟の機関紙誌に課せられてゐる任ムを以上のたつたに確定したことを、このたつな任ムに基

き、当面の目標、戦後、の週刊化を実現しなければならぬ。

戦後、週刊化は①、集会的組織者としての機関紙の機能をより密度を高め、②同盟活動のより定期的な推進をおしはかるという使命から実現され、確保されねばならない。ある意味では、週刊化は全同盟の全面的活動を同時に、そして一挙に週刊化させたために、せしむる実現されねばならない方針であり、全同盟が主体的にこの方針を支持し、おしすすめることなしに、従って実現しえないものである。

週刊化に伴い、戦後、は、その紙面の一部を毎号にわたって理論的問題にさくことが可能となり、それを通じて継続せざるであらう。

また紙面の一部に、全国から集中せしむるであらう。斗争報告を集中し、分析、運動の前進の鼓動を伝へるであらう。また隔号ごとに読者からの手紙を公開し、支持者がさらに拡大し、その拡大する階級の広さを伝

えつるであらう。

原則上の問題として、各細胞は、その定期的な紙面の討議を行ない、地区委員会を通じて、賛否を問わずその意見のすべてを、P・B、編集局に集中しなければならぬ。地区党、大衆細胞は同盟の最前線基地であり、そこにおける斗争（活動家、大衆との政治論争）を媒介にせず、どんな武器を鍛えあげることができない。すべての同盟活動が、まさに七の年安保を反帝斗争の一大焦点として、斗いぬく政治路線のもとへの組織化、結果をめぐりて開始されなければならない。戦後週刊化はあえていつならばこの同盟活動をおしすすめるための前提であり、橋頭堡である。編集局が多少の危険と冒険をおかしても週刊化への同盟員、細胞、各級機関の積極的協力を要請する根拠はここにたつてゐる。

(五)

週刊化を保障する決定事は、財政（紙代の即時完納

とカンパ、拡大）と編集局の体制問題である。

周知のように、同盟内解放派は水沢一派の卑劣かつ悪質な妨害によって、編集局は一歩も進まない財政、個人送送の手書きの死名書き、しかもそれをおかずか三名の編集局長（大谷前は七名）の手によってなされねばならぬという悪条件から出発しなければならぬという悪条件から出発しなければならぬ。だが、同盟と編集局の強固な政治的団結はこの水沢派の卑劣、悪質な妨害を粉砕し、同志的借入金や雪だるま的に増大させ、編集局長の不服不休の努力を重ね、一二七〇一二九号の編と発行をかちとつた。

我々は一二三二号をもって週刊化を提起している。

この実現と確保こそ、解放派、水沢派、杉村一派の陰謀を根底的に粉砕しつくすことになるであらう。

① 定期購読料収を杉村前編集局長が掃蕩し逃亡している。かつまた、印刷所に十数万円の借金を残されたまゝである。

② 戦後毎号発行ごとに、約五万五千円の至費

(印刷、郵送、その他)が必要である。

③ 我々は、当面この至を、各細胞における

紙代の完納、④ 街頭、斗争、集会における販売

⑤ カンパによって調達しなければならぬ。

⑥ しかも、週刊化という早いテンポのなかでこの資金調達をなすわけがなければならないという必要にせまられてゐる。

だがこの資金調達は、算術上、③の諸条件が確保に実行され、現金が確実に編集局に届けらるるならば、当面の解決としては可能である。当面の解決といふのは、借入金の暫定的凍結と、各号発行至を切りつめることによるものである。

この当面の解決による自転車操業を五月中は重ね六月以降、経営の改善をからとていかねばならぬ。編集局の負債は四月三日現在、二十余万円にのぼり、当面増大は不可避である。だが、「共産主義」の発行、諸パンフレットの発行の討議をひかえて、この負債を粉砕し、むしろ発行準備のための資金を確保することは急務である。(最近では、印刷資本の警戒がさびしく、前借金なしに印刷物をつくることは不可能に近い。)

従って、我々にとつて緊急に問題となるのは、③の当面の解決をいかに早急に、着実に実行するか、

という問題であり、週刊化を軌道にのせるか否かは、この実現如何にかゝっている中で、全同盟員、細胞地区委の責任は重大である。

一この実現のため、

Ⅰ(A) 各支局は支局責任者、

(B) 都府細は各細胞長な責任者、学生細胞に
ついても同様。

これらの責任者が、確実に紙代を回収し、オN号を受けとりに来る時には、その前号、即ちN号の有料紙代全額を携って受けとりに来ること。

各支局では、N号が到着次第、N号の代金を現金でせんとし、野田宛に直送すべきこと。

紙代回収が不可能な場合は、当面過渡的に責任者が立替えていただくようにおねがいする。

むしろ、各細胞で積極的の支持者、活動家への一部売りを組織的に行なうならば、紙代回収は不可能なことでは絶対にならぬ。逆に拡大が可能ならばである。

Ⅱ 革命的共産主義運動の関心が増大している。38斗身、3引、4引、4引を通じて斗争現場の一部売り、立ち売りはインフラ斗争以来の額にのほ

売りの正確かつ即時の回収、定期購読料の拡大である。週刊化の唯一の保障はすべてこのにかゝっている。

Ⅲ

編集局体制は現在

神島 (都府細、株田担当)

江川 (都府細担当)

野田 (全同支局担当)

松村

の四名である。この四名では日常的活动を消化するだけでも困難であり、編集局の情宜局への発展のために、さらに数名の要員を確保しなければならぬ。編集局は、集約的組織者としての新、業を送り出す中核であって、インテリたちの問題意識の革命的報炊の心算をまりではない。あらたに構成される編集局はこの意味で確実な革命的規律に基いて組織に経営活動を実行しうる要員をまわって構成しなければならぬ。

(六)

最後に、かかる編集局がまさに革命の時までその機能を保持しつづけるといふ展望に基いて、若干の

(A) 学生、労働者を問わず、街頭カンパを行なう際には、必ず二三名のせんき販売員を組織し、立ち売りを発行してはしむ。これは、単に収入増加のためだけでなく、同盟の影響力を諸階級におしひろげ多ために不可欠の革命的任ムである。これは従来、同盟員が一読者を獲得する運動をはるかにこえた発展である。

(B) 各地区委員会、週一回、発行日の翌日、主要ターミナルで党任と公然化してよい労働者同盟員を組織して、戦旗の街頭販売を各階級の前に6二なっていたり、定期的におこなわれるこの活動は、風雨晴雪を問わず、定期的におこなわれるこの活動は、人民階級の向に共産主義者同盟の確乎たる存続を知らせ、呼びかけを通じて革命的階級関係をつみだすべく初步的であるが重要な契機となるはずである。

(C) 農芸、斗争現場の立ち売りは編集局員を中心におこなう。同盟員は編集局員の指示に協力してこれに加わっていただくようにおねがいする。

以上のように経営正常化の基本は、紙代の一部

同盟にふれる。

(A) 地下編集局の設立

緊急にこれが必要とされている。争ム所、学生自治会は不断に官校のイヌのガサの村象になり、多くの資料、住所録、カード、残余のパンフを備えなければならぬ。編集局は、同盟員にすら秘密の、地下編集局にそのすべてを集中し、機能しなければならぬ。この建設について、多くの同盟に財政支援をおねがいする。

(B) 連絡方法

やがて完全な非合法化に移る場合である。S体制は最低確保されることを前提として、地下編集局への連絡は、地下編集局からの一方的連絡による以外にない。地下編集局からの連絡は、定められたS責任者と副責任者にたいしておこなわれるのである。この二名が同時に官校の手によって逮捕されることがあった場合は、同盟員はただちにSを捕獲し、責任者を救出し、P・Bを通じてあらゆる連絡先を地下編集局へ通知すること。紙・誌・パンフの具体的な手渡し方法は、その都度多様な方法で変化させる。これも地下編集局からの指示

にまっくほしい。

— 上 —